広池千九郎と中野金次郎

中野千秋

目次

一、はじめに――従業員諸君はすべて最高道徳者たれ
二、中野金次郎の生い立ち
三、中野と広池の交流
四、結びにかえて

一、はじめに――従業員諸君はすべて最高道徳者たれ

昭和四年（一九二九）九月二十六日、東京府下各駅合同運送会社従業員を集め、広池千九郎を招聘しての講演会が開催された。この会を主催した国際通運株式会社社長中野金次郎は、その挨拶の中で次のように述べている。

私は大正四年より広池博士と大変懇意になりまして、以来絶えざる御指導を仰いでいるのであります。そのお蔭で今日まで、さして大過もなく、はたらくことが出来ました。また現在この重要なる地位をどうにか支え責任を果しつつあるのであります。さき程も博士より懇々と御説明がありましたごとく、最高道徳をわ

きまえることによって初めて我々は完全な人としての価値が生ずるのでありまして、私どもは最高道徳者となることに努めねばなりません。博士の道徳科学の御研究は世界最初のものでありますから、従ってこれを実行することは容易ではないのであります。私も大正四年以来、博士の最高道徳論を実行致します中に、ドウも疑義が生じて来るのでありました。その度に何時もこの不審の個所を研究致しますけれども、また次から次と諒解に苦しむ点があらわれて来るのでありますが、私は絶えずその疑義を氷解することに努めては実行して来たのであります。……大正十五年に企てられました運送店合同は、小運送費の軽減、輸送の安全、正確、迅速、取扱いの親切を期し産業合理化を図る理想に出発するのであります。これが合同した今日も従前と何等の進歩発達もなく合同の真目的が其の一も達成されていないとなれば、運送合同の意義は何処にも認められないのであります。

故に何処までもこの目的を果たすためには従業員諸君がこぞって最高道徳者となって下さらなければならないのであります。[1]

大手運送業者合併が実現し、運送業界の合理化はついに最後の詰めの段階にさしかかった。いまや、各地合同運送の従業員一人ひとりを最高道徳によって啓発し、その協力を得ること以外、真に理想を実現する道はない。そんな中野の熱い願いが伝わってくる。

中野金次郎――運送王とも称される昭和前半期における財界の実力者である。その中野が、生涯の師として仰ぎ続けたのが広池千九郎である。中野は、広池の提唱する最高道徳に心底から共鳴し、広池の人格に深く傾倒し続けた。

中野は、広池が長期にわたって交流を続けた人物の中でも、実業人としての実力および社会的影響力において、

抜きん出た存在である。またモラロジーへの傾倒と貢献の度合いにおいても著しいものがある。中野と広池の間にそのような交流があったことは、多くの人の知るところである。しかし、それはあくまで語り伝えの域にとどまり、根拠ある資料に基づいて系統立てて論じられることはほとんどなかった。

そこで本稿は、中野と広池の交流についての事実関係を整理することを主な目的とする。つまり、中野の人生において、広池の存在がどのような意味をもっていたのかを浮き彫りにしようという試みである。そこにまた、従来とは違った新たな広池千九郎像が浮かび上がってくると思うのである。

そこでまず第一に、中野金次郎の生涯について簡単に紹介しておくことにする。両者の交流における個々の事実関係は、中野の全生涯の中で位置づけられることによって、初めて生きた意味をもって現れてくると考えられるからである。そして第二に、中野と広池の交流に関する主な事実について、時代を追いながら論じていきたい。

広池による中野金次郎指導は、個人救済的な家業経営の域を超えた、企業経営者ないしは財界人救済の典型事例としてとらえ、広池の実業人指導の一つのモデルとして位置づけることもできよう。しかし、そのためには、限られた資料に対して、かなり高度の解釈を加えねばならず、場合によっては様々な推測を要する場合も出てくると思われるが、それは筆者の手に余る仕事である。本稿では、その準備作業として、できるだけ資料に忠実な形で事実関係を整理していき、若干の解釈を加えるのみにとどめたいと思う。

二、中野金次郎の生い立ち

(一)門司巴組時代――青少年期～一廻漕店主として（出生～三十八歳）

中野金次郎は、明治十五年（一八八二）、福岡県遠賀郡藤木村に、父要七、母キヨの次男として生まれた。[2] 兄が

その前年三歳で夭折したので、金次郎は長男として育てられた。中野家は農業のかたわら、村でただ一軒の荒物屋を営んでいた。要七は、「まじめすぎるくらい、まじめな人」とうわさされるほど温厚実直で黙々と働く善良な父であった。しかし、幼少期の金次郎が特に大きな影響を受けたのは、むしろ店をきりもりしていた母キヨからであった。

金次郎が藤木尋常小学校にあがってもあまり勉強に身を入れる様子がないのを見て、将来を案じたキヨが、学校に頼んで金次郎を無理に落第させたというエピソードが残っている。金次郎は後年、幼い頃一番辛かったのは、「同じ学年をやり直さなければならなかったことだ」と述懐したというが、もっと心を痛めていたのは、悲嘆にくれる我が子の姿を見ていた母の方であったに違いない。しかし結局、金次郎は、母の慈愛にあふれる励ましを受け、猛烈な勢いで学問に取り組むようになった。

明治二十八年、十五歳の中野は、若松の高等小学校を卒業すると、母の勧めもあって一年ほど行商をした後、知人の紹介で筑豊鉄道に勤めることになった。中野の仕事は社長付きの給仕であった。社長は、中野の従順さとてきぱきとした働きぶりに満足し、大いに可愛がった。この社長が後の鉄道大臣・仙石貢であり、中野は内国通運の社長として彼と再び会うことになるのである。

中野は筑豊鉄道で数年間勤め、次第に昇進昇給していった。その間、三つ年下の従妹シナと結婚した。金次郎二十三歳の時であった。シナは、金次郎の母方の伯父の娘であったが、金次郎の叔父の秋田又次郎の養女になっていた。シナは、後に幾世子と改名したが、金次郎の母キヨに似て男まさりの気性でよく働いた。

明治三十八年、そんな中野に生涯の分かれ道ともいうべき転機が訪れた。叔父の秋田又次郎は下関で巴組肥後又という廻漕店を経営していたが、その門司支店が経営不振に陥り、中野に支店の建て直しを依頼してきた。最

【別表】 年譜 ― 中野金次郎と広池千九郎

	年代(西暦)	中野金次郎の生い立ち	広池千九郎略年譜	社会経済
青少年時代	慶応2(1866)		3月29日、千九郎生まれる。	
	M. 13(1880)		永添小学校の助教となる。	
	M. 15(1882)	5月20日、福岡県若松市(遠賀郡藤ノ木村)に、父要七、母キヨの次男として生まれる。		M.15. 日本銀行創立。
	M. 18		大分師範学校の応請試業に合格。	
	M. 21(1888)	藤ノ木小学校入学。	『新編小学修身用書』発行。	
	M. 22		ハルと結婚(23歳)。	M.22. 大日本帝国憲法発布。
	M. 24(1891)	母の計らいで特に落第させらる。	『中津歴史』発行。	M.23. 1890年恐慌。
	M. 25		京都に上京、『史学普及雑誌』創刊。	M.25. 鉄道敷設法。
	M. 26(1893)	若松高等小学校入学。	長男千英生まれる。	M.27. 日清戦争。
	M. 28	同校卒業、家事、農業、油類の小売行商を営む。		M.28. 下関講和条約(於春帆楼)。
	M. 29		『古事類苑』編纂のため東京へ上京。	M.29. 航海奨励法、造船奨励法。
	M. 30(1897)	7月、筑豊鉄道へ給仕として入社。		M.30. 金本位制の確立。
	M. 32	給仕から傭に昇進。	『支那文典』脱稿。	M.34. 八幡製鉄所開設。
	M.37(1904)	3月、シナ(幾世子)と結婚(23歳)。	大病。	M.37. 日露戦争。
巴組時代	M. 38	11月、下関市巴組肥後又門司支店を叔父秋田又次郎から引き受ける。	早稲田大学で東洋法制史を講義。母リエ死去(65歳)。	
	M. 39	長男生まれる。	『日本文法てにをはの研究』発行。	M.39. 鉄道国有法公布。
	M. 40(1907)		神宮皇学館教授に赴任。	M.40. 1907年恐慌。
	M. 42		天理教入信。	M.43. 日韓併合一朝鮮総督府。
	M. 44(1911)	中国辛亥革命に際し武器輸送に一役かう。		M.44. 中国辛亥革命。
	M. 45.T. 1		大正元年の大患。法学博士号授与。	
	T. 2(1913)	門司清滝町に新宅を建築。	天理中学校校長ならびに天理教顧問。	T. 3. 第1次世界大戦勃発。
	T. 4		天理教を退く。山陽地方を巡回講演。	T. 4. 対華21ヶ条要求。
	T. 5(1916)	2月、巴組を合資会社にする。	『日本憲法淵源論』発行。	
	T. 6	門司商船会社を設立、彦島丸などを建造。		T. 6. 金輸出禁止。
	T. 7(1918)	米価騰貴の際、門司市民窮民救済の寄付により、金杯一組を受ける。	『稟告』発行。	T. 7. 米騒動起こる。
		5月、門司市会議員当選。		T. 7. 第1次大戦休戦条約。
	T. 8(1919)	8月より、広池に毎月200円ずつ研究費を出す?		T. 8. ベルサイユ条約締結。
		10月、門司海運業組合設立、組合長に就任。	8月、父半六死去(79歳)。	
		10月、下関海運業組合設立、組合長に就任。		
		10月、父要七死去(71歳)。		
	T. 9(1920)	1月、内国通運株式会社相談役に推薦される。		T. 9. 国際連盟成立。
		5月、鉄道省公認運送組合中央会会長に就任。		T. 9. 戦後恐慌。(以降、慢性不況化)
		12月、合資会社巴組を株式会社に変更、社長に就任。		
	T. 11(1922)	1月、門司商業会議所会頭に就任、内国通運株式会社監査役に就任、鉄道50周年記念式典に運送事業関係による功労で鉄道大臣の表彰を受ける。	朝鮮開発。 初孫千太郎生まれる。	T.10～11. ワシントン軍縮会議。 T.11. 日本共産党創立。
	T. 12(1923)	2月、母(キヨ)死去(70歳)。		
内国通運時代		5月、内国通運株式会社専務取締役に就任。		
		8月、大北火災海上運送保険株式会社社長に就任。	8月より、畑毛温泉で『論文』執筆に専念。	
		9月、関東大震災の臨時救護事務局事務を嘱託さる。		T.12. 関東大震災。
	T. 13(1924)	3月、鉄道省小運送制度調査委員会委員に就任。	この頃『論文』執筆に終始する。	
		4月、内国通運株式会社社長に就任。		
	T. 14(1925)	この年、麹町中六番町(現四番町)に居を構える。		T.14. 普通選挙法成立。
	T. 15	10月、合同運送発足、副社長に就任(社長は中島久万吉)。	『論文』謄写版印刷完成。	
	S. 2(1927)	11月、内国通運が、国際運送、明治運送、合同運送の三社合併の仮契約を結ぶ。	報恩協会を渋谷に設立。	S. 2. 金融恐慌。
国際通運時代	S. 3	3月、4社を大合併し、国際通運株式会社を設立、社長に就任。		
		8月、門司合同運送株式会社社長に就任。	12月、『論文』を公刊。	
	S. 4(1929)	2月、東京商工会議所(旧名東京商業会議所)議員に当選、常議員に就任。	『孝道の科学的研究』発行。	
		12月、目白下落合の私有地200坪をモラロジー研究所に提供する。		S. 4. 世界大恐慌。
	S. 5(1930)		『特質』レコード吹き込み。	S. 5. 金解禁。ロンドン軍縮会議。
	S. 6	3月、名古屋駅合同運送株式会社社長。	5月、栃尾又の大患。	
		3月、秋葉原運送、飯田町合同運送、隅田川合同運送、東京両国合同運送、錦糸町合同運送、品川駅運送、小名木川運送の7社を合併し、東京合同運送株式会社と改称、社長に就任。	9月14日、千英、合同運送の教養として嘱託に。 9月21日、大毎講堂で産業経済大講演会。	S. 6. 柳条溝事件、満州事変。
			12月、『旧紀要』第1号発行。	S. 6. 金輸出再禁。
	S. 7(1932)	1月、神戸合同運送株式会社社長。	2月、軍部大陸侵略に付き、鈴木貫太郎に進言。	S. 7. 血盟団事件。
		5月、名古屋合同運送株式会社社長。		S. 7. 満州国建国宣言。
		10月、京都合同運送株式会社社長。	9月、下落合に東京講堂完成。 10月、東京第1回モラロジー講習会開催。	S. 7. 5・15事件。
	S. 8(1933)	2月、東京商工会議所副会頭に就任(同13年10月辞任)	5月、斎藤実、若槻、高橋らに進言。 12月、小金町に敷地の購入決定。	S. 8. 国際連盟脱退。
	S. 9(1934)	11月、下関合同運送株式会社社長。	5月、専攻塾建築に着手。	S. 9. 帝人事件。 S. 9. 伊、エチオピアを侵略。
	S. 10		4月、専攻塾開塾。 12月、『道徳科学経済学原論』レコード吹き込み。	
	S. 11(1936)	鉄道省小運送制度改革調査委員に就任、日本通運株式会社法制定と同時に解任。	7月、大阪講堂竣功式。 10月、谷川講堂を購入。	S.11. 2・26事件。 S.11. 日独防共協定。
	S. 12(1937)	9月、国際通運株式会社を日本通運株式会社に引き継ぎ解散。	4月、賀陽宮にご進講。	S.12. 芦溝橋事件、日中戦争。
戦前・戦後期	S. 13	10月、巴組汽船株式会社を設立し、社長に就任。	6月4日、逝去(72歳)。	S.13. 国家総動員法。
	S. 16(1941)	大政翼賛会調査委員会委員、大政翼賛会東京支部顧問。	道徳科学研究所解消。	S.16. 太平洋戦争始まる。
	S. 17	(財)広池学園理事。	(財)広池学園設立。	
	S. 18	日本海員接済会理事。		
	S. 19(1944)	2月、大北火災海上運送保険、辰馬海上火災保険、神国海上火災保険、尼ケ崎海上火災保険の4社を合併し、興亜海上火災運送保険株式会社を設立、社長に就任する。		
				S.20. 終戦。 S.21. 新憲法公布。
	S. 22(1947)	9月、公職追放後、興亜海上火災の仕事に専念。	道徳科学研究所再建。	
	S. 25(1950)	10月、自由党参与。	麗沢短期大学設立。	S.25. 朝鮮戦争。
	S. 26	1月、日本工業倶楽部理事に就任。		S.26. 特需ブーム。
		11月、巴組汽船株式会社を中野汽船株式会社と変更し、社長に就任。		S.26. 講和条約。安保条約。
	S. 27(1952)	11月、日本通運株式会社取締役に就任。		
	S. 29(1954)	3月10日、夫人幾世子死去(69歳)。		
		11月、中野汽船株式会社会長に就任、社長は長男敏雄に譲る。		
	S. 30(1955)	1月、紺綬褒賞。4月、日本経営者団体連盟常任理事。11月、黄綬褒賞。		S.30. ガットに正式加盟。
	S. 31	6月、日本通運株式会社相談役に就任。		
	S. 32(1957)	10月、勲4等旭日小綬章。 同月30日、脳溢血で逝去(76歳)、従5位に叙せらる。		

初は頑なに断り続けたが、結局これを一万円で買い取ることにした。[3] ここに中野は、若き海運業者としてその経営に身を投ずることになるのである。

経営者としての中野の出発は、思い切った人員削減に始まる困難な道程であった。仕事は門司港に入って来た船の荷役や船主の代理を行なうというもので、中野は早朝から深夜までわき目も振らずに働き、また妻シナもこれをよく助けた。開業の翌年には、長男の敏雄が誕生した。店は順調に発展し、使用人も次第に増えていった。日露戦争後の不況を乗り切ると、若松に出張所を開き、続いて下関の巴組本店の経営も引き受けるようになった。巴組は、大正の初め頃には、北九州一帯に覇を唱えるまでに成長していた。

興味深いのは、この間、金次郎が行なった人脈づくりである。明治四十三年（一九一〇）の日韓併合以来、朝鮮や満州に渡る人の数が年毎に増えたが、中野は、朝鮮への往来に下関でかなりの待ち時間があることに目をつけ、政財界を初めとする名士の歓迎会や送別会を盛んに開いた。ここで得られた人脈が、後に通運社長として中央で活躍した時に、どれだけ役に立ったかは測りしれない。

大正三年（一九一四）には、木屋瀬、横島などの炭鉱業にも手を出すが、やがて撤退した。第一次大戦が始まると、特に海運需要は飛躍的に高まり、同四年にはいよいよ海運の中心神戸に巴組神戸出張所を設置した。中野が広池千九郎と初めて出会ったのはこの頃である。また、船価の高騰する中、同六年には門司商船という会社の社長を引き受け、初めて船舶の建造にも手を出したが、間もなく終戦を迎え、これは失敗に終わった。

大正六年、中野は故郷の藤木に別邸を建て、両親に移り住んでもらった。贅沢な造りの立派な建築で、中野にとっては父母に対する最大限の孝養のしるしであった。しかし、その母から、中野はまたも重大な忠告を得ることになる。

お前の事業も順調に発展し、このような家を建ててもらって大変有難いが、三十代でお前のように成功した人は少ない。一時はもうけても皆失敗している。だから、お前もその点はよく注意して、世のなかがどんなことになっても、その備えをいまからしておかなければいけないと思う。[4]

その頃、中野は戦争景気に乗じ、あくまで積極的な営業方針を掲げて前進するつもりであった。しかし、以前から親に対してだけは絶対服従を旨としていた中野は、この母の助言をよく聴き入れ、終戦に備えた控え目な方針に大きく変更した。

この方針変更は意外に早く効を奏することになった。大正七年(一九一八)の十一月に大戦が終了、大正九年の春頃から反動恐慌に入り、海運業者の倒産も続出した。その中で、巴組が根強く生き残ることができたのは、あの母の助言があったからこそといっても過言ではない。

この間、中野は、大正七年五月に門司市会議員に当選、また同年、米価高騰(いわゆる米騒動)の際に行なった門司市窮民救済の寄付に対して市より金杯を受けるなど、地元での社会的地位と信用を高めている。また大正八年六月には門司商工会議所の議員に、九月には推されて門司鉄道局管内公認運送取扱人組合連合会会長に就任、さらに十月には、門司および下関に海運業組合を設立し、自ら組合長に就任した。まさに、門司に新星出現、中野の名は次第に中央にも届くようになっていった。八年十月、父要七が脳溢血で七十一歳の生涯を閉じた。

(二)内国通運時代——運送大合同を目指して(三十八〜四十六歳)

ちょうどその頃、内国通運では、相次ぐ経営者の交替に紛擾を極めていた。すでに「陸の通運」と呼ばれるまでになっていたが、内情は、株式買い占めによる会社乗っ取りの陰謀や役員間の確執など、醜い経営の主導権争

いが繰り広げられ、大いに動揺していた。大正八年(一九一九)、その内国通運に、株式を押し付けられて社長に就任したのが三上豊夷である。また三上は、公認運送取扱人組合中央会会長にも就任している。三上は神戸三上廻漕店を経営する海運業界の実力者で、中野が深く兄事する人物であった。[5]

三上は内紛著しい内国通運の経営を引き受けるにあたり、その相談役に中野を推薦、翌大正九年一月、中野はその相談役に就任した。中野が郷誠之助との知己を得たのはこの時である。郷もやはり内国通運の相談役を勤めていた。この郷との出合いが、財界人としてのその後の中野の人生に大きな意味をもつことになるのである。

しかし、いざ引き受けてみると、通運の内部紛争を手をこまねいて見ているわけにはいかない。大正十一年一月には監査役に就任、十二年五月にはとうとう専務取締役となって、病気がちの三上社長を助け、通運の経営をきりもりしなければならないはめになる。中野は、巴組の社長を実弟真吾に[6]譲って取締役に退き、住まいも東京に移して通運立て直しに全力を尽くすことにした。海運から陸運へと転身した中野に対して、「陸に上がった河童」と揶揄する者も多かったが、ここに至っていよいよ本格的に陸運業界にその身を挺することになったのである。

なお、大正八年二月には、母キヨが若松郊外の藤木別邸において七十歳の生涯を終えた。

中野は、大正十二年の夏から、現場の実態を把握するため、全国支店視察の旅に出ていた。九月一日、ちょうど北海道の視察を終えて帯広駅を出たとき、関東大震災の報せが届いた。鉄道の不通により、中野がようやく東京に戻りついたのは、九月四日の朝であった。政府は復興院を設け、内務大臣後藤新平を総裁として、帝都再建に踏み出した。内国通運でも、中野の指示で、市内各支店にバラックの仮営業所をおいて、一斉に営業を再開、とくに救護品の配達は無手数料で取り扱い、罹災者救済に貢献した。

政府は、市内の各駅、芝浦の埠頭に山積みされた滞貨の輸送を陸海軍に依頼したが手に負えず、後藤は、中野

の進言により民間の嘱託団を設置、市内の小運送はこれに任されることになった。嘱託団は、三井、三菱、日本郵船、東京瓦斯、三越などの代表十三人によって構成されていたが、実際には、ほとんど中野が引き受けて内国通運がその運送に当たった。この時の中野の働きぶりは著しく、また後藤を初めとする政財界の大物との人脈も深まった。

鉄道省は、この大震災の経験により、小運送制度の欠陥を悟り、大正十三年三月には、その改善に向けて鉄道大臣監督の下に小運送調査委員会を設置した。中野は、鉄道公認運送取扱人組合中央会会長として委員の一人に加わった。さらに同四月には、三上の後を受けて、内国通運の社長に就任した。病気がちの三上に代わって専務時代から経営の実権を握っていたので、中野の社長就任は時間の問題となっていた。

当時、運送業界においては、全国各地に多数の小運送店が鎬を削ってひしめき合い、激烈な競争を続けていた。たとえば、東京の汐留駅には百五十三軒、秋葉原駅には八十三軒、大阪梅田駅には百七十五軒といった具合である。その結果、どの店も人件費や設備費に出費がかさみ、運送料の高騰を招いて混乱をきわめていた。

中野はかねてより、このような小運送問題を改善することが急務と考え、ことあるごとに鉄道省や管轄官庁である逓信省に働きかけてきた。政府においてこの問題に初めて積極的な関心を示したのは、大正十三年、犬養毅に代わって逓信大臣となった安達謙蔵であった。中野は、安達逓相に対して、運送業の実態に則し、監督権を逓信省から鉄道省に移すことにより、大運送と小運送の一体化を促進すべき旨を進言したが、安達は国家的見地からこの主張をよく聴き入れ、鉄道省への管轄移行を決定した。

また中野は、大阪毎日新聞社社長本山彦一にも小運送改善問題を語り、本山の共感を得て、新聞の論説にこの問題の重要性について初めて掲載するなど、世論の形成にも手を尽くした。また大同電力社長の福沢桃介、浅野

セメント社長の浅野総一郎その他の財界有力者に対しても、執拗に意見を述べてまわり、多くの賛同者を得た。

「一駅一店制」、すなわち各地の運送店を合同して、一つの駅には一つの運送店を、というのが中野の達した結論であった。しかし、それは、長い歴史をもつ運送業界全体を再編成する一大変革を意味するもので、想像を絶する困難が予想された。しかし中野には、運送業界の安定と小運送費の軽減を実現して、庶民生活の便宜を図る方法をそれ以外に考えることはできなかった。

中野はまず、一方で鉄道省運輸局長種田虎雄を説得して、一駅一店制度への同意を取り付け、さらに鉄道大臣仙石貢にも働きかけた。また一方では、競争相手である国際運送、明治運送といった中央の大運送会社にもひそかに根回しをし、大合同の下地作りに奔走した。こうして、大正十五年六月、鉄道当局は声明を発表し、運送業の大合同を促した。

すでに中央の運送三社は、過去の行きがかりを水に流し、率先合併して全国の業者に範を垂れることで意見の一致をみていたが、全国各地の支店、代理店、取引店をすべて統合するのは業務上困難であるから、形式的な合併は一時見合わせ、大正十五年十月、三社存続のまま、共同出資で新たに合同運送株式会社を設立することになった。社長には、国際運送社長の中島久万吉が、副社長には中野が就任したが、実務は主に中野が統括した。

一口に「一駅一店制」といっても、個々の業者にしてみれば死活問題である。いざ実施となると様々な利害が交錯し、合同に対しては賛否両論、強硬に反対する者も根強く、各地の合同発足は難航を極めた。それでも、中野らの献身的努力により、昭和三年（一九二八）三月には、内国通運が中心となって、国際通運、明治通運、合同運送の四社を合併し、国際通運設立の運びとなり、中野が社長に就任した。今日の日本通運の前身である。

㈢国際通運時代――中央財界の実力者として（四十六歳～逝去）

ところが国際通運は発足まもなく、早々と経営の危機に瀕した。貨物の宅扱いで思うように利益が上がらず、合併による人件費の節減も予想通りにはいかなかった。中野は巴組時代から人を大切にすることを信条としてきたが、ここに至って身を削る思いで人員整理を断行、さらに鉄道当局に折衝を繰り返した末、百万円の補助金交付[7]を得て、ようやく経営立て直しに成功した。各地の合同も次第に進展し、昭和七年（一九三二）頃までには全国主要都市のほとんどに合同運送が発足し、中野は多くの合同運送の社長を兼任した。

中央の通運業界に進出して以来、中野はこうして際立った実力を発揮し、また財界に隠然たる力をもつ郷誠之助の知遇をも得て、経済界における地位も次第に重みを増していった。昭和四年には、東京商工会議所の議員に当選し、常議員に就任、さらに八年には副会頭に就任し、以後六年にわたって会頭の郷を助けることとなった。

昭和九年、大疑獄として知られる帝人事件が起こった。その導火線となったのが、同年一月から二月にかけて時事新報に連載された「番町会を暴く」という武藤山治の記事であった。番町会は、郷誠之助を慕う実業家たちが、月に一回郷の自宅に集まり、食事などを共にしながら世間話をするという私的な親睦会にすぎず、主なメンバーとしては河合良成、正力松太郎、永野護、金子喜代太、渋沢正雄らがいた。[8] しかし永野が帝人事件に関係していたことから、会そのものが帝人乗っ取りを企てたとして、武藤に告発されたのである。それは全くのぬれぎぬであった。ところが事件は思わぬ方向に発展し、中野こそ取り調べは免れたものの、無実の河合良成が被疑者となり、番町会の会員でない中島久万吉までが投獄されて、中野の胸中も穏やかならざるものがあったに違いない。

さて、運送の大合同が実現し、国際通運の傘下に全国の運送会社が大部分統合されて、独占に近い形になって

きた。しかし、まだ合同に加わらない運送店もかなり残っていた。中野は、完全な独占企業になってしまうと、どうしても業務がルーズになるなどの弊害が生じるであろうから、ある程度競争の余地を残しておくべきと考えていた。ところが、鉄道当局は、是が非でも一駅一店制を徹底的に進めようとした。この辺りから、当局と中野の考え方の隔たりが顕わになってきた。

また、業界における反中野派勢力も根強いものがあり、当局の一部の者にも働きかけて、中野排斥の動きが出始めた。「出る杭は打たれる」のことわざがあるように、中野の快進撃に対する妬みもあったのであろう。次第に軍事色の強まる風潮の中で軍部が勢力を振るい始めたが、当局が食糧、物資、兵器などの輸送を思い通りにする上で、中野の存在は目の上のたんこぶと映ったのかもしれない。

まず、昭和十年、日銀事件と呼ばれる国際通運のスキャンダルが告発された。[9] 通運が、日本銀行の貨幣を自動車で輸送しながらそれより高い鉄道運賃を取っているのは不当であるとの非難が行なわれたのである。これに対しては、通運側が正当な反駁をすることによって事態を収拾したが、通運のイメージダウンは否めなかった。

また、中野が国際通運の社長だけでなく、各地に生まれた合同運送の社長を十数社兼任し、それぞれから俸給を得ていることに対する攻撃もなされた。社長の兼任は、必ずしも中野が希望したものでなく、そうしなければ会社の合同が成立しなかったため、兼任やむなきに至ったという方が正確で、中野にしてみれば十分批判に打ち勝つ自信はあったが、次第に自ら身を引くことも考え始めていたようである。

そして中野の引退を決定づけたのは、鉄道省による日通法の提出であった。国際通運を解散させて、国策会社である日本通運株式会社を設立し通運事業を継承すると共に、小運送業を免許制にしようというものであった。結局、同法案は昭和十二年（一九三七）四月に成立、国際通運は九月三十日をもって解散、中野は従業員に慕われ

ながら通運に別れを告げた。

中野は、これを機会に、それまで兼任していた合同各社の社長からも退任し、大正十二年から務めていた大北火災海上保険会社社長の職務に専念した。また、巴組から船舶部門を分離して新たに巴組汽船株式会社を設立し、[10]その社長にも就任した。

通運業界からは引退したものの、この頃には名実ともに財界を代表する地位にあり、政財界における数多くの公職を請われて相変わらず多忙の日々が続いた。昭和十六年には太平洋戦争に突入するが、中野が戦時中に務めた役職としては、大東亜経済連盟副会長、臨時物価対策委員会特別委員、経済団体連盟常任委員、中央物価委員会委員、日本商工倶楽部理事長、中央失業対策委員会委員、東亜経済連盟懇談会理事、大政翼賛会東京支部顧問等々、数え切れないほどである。特に、横暴を極める軍部に対する危惧の念を次第に強くし、軍の中枢に民間の意志疎通を図ろうと、軍務局と財界人の懇談の機会斡旋などに奔走した。さらに昭和十九年二月には、大北火災海上、辰馬海上火災、神国海上火災、尼崎海上火災の保険会社四社を合併し、興亜海上火災運送保険株式会社を設立、自ら社長に就任した。

敗戦後、中野は自ら主宰する二つの会社の経営に全力を注ぎ、昭和二十五年（一九五〇）には、再び日本通運の顧問に返り咲いた。立場はあくまで社外重役であったが、長年通運業界に貢献した中野の影響力は大きく、社員からは「中野法王」とも呼ばれた。財閥が解体され、電力なども分割されたにもかかわらず、独占企業である日本通運がそのまま継承された。

中野は青年時代から国家や民族に一方ならぬ関心を抱いてきた。昭和二十六年には、日本工業倶楽部の理事に、三十年には日本経営者団体連盟常任理事に就任したが、そこでも財界の顔役として日本の将来について真剣に論

じた。広池なき後、安岡正篤に師事し始めたのもこの頃からである。

また政界とのつながりも深く、昭和二十五年には自民党の参与になっている。特に将来の総裁候補と目されながら急死した緒方竹虎との親交は緊密で、保守合同問題などに対しても相当意見したようである。その後は岸信介、佐藤栄作、砂田重政、牧野良三などの知友と絶えず連絡をとり、政治に対する批判や激励を行なった。その内容も、経済問題、内政・外交問題全般にわたった。[11]

昭和二十九年三月十日、五日後にひかえた金婚式を楽しみに指折り数えながら、最愛の妻幾世子が六十九歳の命を閉じた。幾世子は、数年前から伊豆伊東の別荘で病床にあったが、中野はどんなに多忙な時でも、毎週末には必ず夫人を見舞うのを常としていた。それほど中野の妻に対する愛情には深いものがあった。

中野自身も、長年の刻苦勉励の無理がたたってか、数年前から肺炎や神経痛を患うなど、自宅で療養することが多くなっていた。それでも国を憂う気持ちは止みがたく、毎朝、顔なじみの政財界人に電話で意見するのを日課としていた。中には、早朝からかかってくる中野からの電話に恐れをなしていた者もいたという。中野の政財界における隠然たる実力が伺われる。

昭和三十二年（一九五七）十月には、勲四等旭日小綬章を受章、民間人としては類い希な栄誉に輝いた。同月三十日、脳溢血に倒れ、七十五年の生涯を閉じた。従五位に叙せられる。

三、中野と広池の交流

(一)広池千九郎との出会い——門司時代

中野金次郎が初めて広池博士に出会ったのは、大正四年（一九一五）六月である。それは、広池が天理教本部を

引退した直後、一信徒として中国地方を講演巡回中のことであった。六月二日、門司に立ち寄った広池が、同市大阪町凱旋座において「近世思想近世文明の由来と将来」について講演会を催した時のことである。ちょうど第一次大戦が始まり、我が国経済は軍需景気に沸きかえっている頃であった。中野は、三十代前半の血気盛んな頃であり、また折からの海運ブームに乗り、巴組を急成長させつつあった。しかし中野は、けっして驕ることなく、広池の講演に熱心に耳を傾けた。とくに広池の「これからは人を使うことがいよいよむずかしくなる」[12]との言葉は、その後の中野の事業を大きく方向づけた。中野は、従業員の待遇をより一層深く考えるようになり、その結果、従業員も努力を惜しむことなくよく働いた。以来、中野は、広池が亡くなるまで二十年以上におよぶ長きにわたって、広池を精神面の師として仰ぎ続けることになるのである。

巴組時代の中野にとって、広池の指導は、実業家としての成功の基礎を形作るものであった。中野の後輩であり、後に国際通運の重役となった松山廉は、『中野金次郎追想録』において、次のようなエピソードを述べている。

> 中野さんはますます商売が繁盛したので、お店を建築しようとして博士のご指導を受けたところ、博士は店よりも船を造れと指導された。中野さんは素直にそれに服従して船を造ったところ、大正三年の第一次世界大戦が勃発してたちまち船成金になった。それで今度は別府に別荘を建てようと思って相談したところ、博士はその金は社会事業に奉仕するようにと指導されたのであった。中野さんは今度もまたお指図どおりに実行された。たまたま大正七年全国に米騒動が起こって、富豪、財閥、米屋等が襲撃、焼討ちされ、門司でも同様に中野さんの隣の家まで焼討ちされたが、中野さんのお宅は、お徳の高い家であるからといって焼討ちを免れたとのことであった。

> ここにおいて中野さんは、道徳実行の効果のいかに偉大であるかを悟って、ますます広池大先生に師事してそのご教導を受け、事業経営の上に道徳科学を応用して、大いにうるところがあった。[13]

指導の内容や年代の記述に不正確な点も多々あるが[14]、広池が単なる精神指導だけにとどまらず、中野の事業や社会的信望にかかわるかなり具体的な指導を行なっていたことが分かる。財をなしながらも、素直に広池の言葉を聞き入れ実行する中野のあくまでも謙虚な姿が伺われて興味深い。

広池の中野救済は、単に事業上のことにとどまるものではなかった。大正七年九月、中野の実妹ハルミの腹膜炎を癒し[15]、また同八年十月には父要七の病状悪化の折りには、三十三夜にわたる守護祈願をかけている。[16]結局、要七はその直後、七十一歳の天寿をまっとうすることになるのだが、我が身内の生命をこれほどまでに親身に祈ってくれる広池の至誠に、感激の情を厚くせざる者はあるまい。[17]

また広池は、この頃、数度にわたって門司で講演会を開いている。例えば、大正七年三月三日には「人類の文化幸福に対する国家主義の価値」と題し、約千三百名もの聴衆を集めており、五月四日には門司教育会の招聘により「皇室中心と国民教育」の講演を行なっている。また、同年九月二十日から二十七日には、北九州一帯の数か所で講演会を催しているが、中野は一週間続けて社員と共に出席したという。[18]

この講演会の直後、中野は、広池のために講演場を建設したいと申し出ているが、広池は「未だ徳足らざるをもって」これを断った。そこで中野は、その費用を運送業の公共のために寄付したといわれている。[19]さらに中野は、翌大正八年八月、今度は広池に毎月研究費を出すことを申し出た。『中野金次郎伝』によれば毎月二百円とある。[20]二百円は、今日の価値に換算してみると数十万円にも相当しよう。いずれにしても、中野の広池に対する傾倒は一方ならぬものがあった。若い日々から国家、民族への念いが人一倍強かった中野が、広池の話にどんな

に胸踊らせたことかは想像に難くない。そして中野は、広池の教えを何とか自社従業員にも浸透させようと、自ら先頭に立って従業員と共に学ぼうとしたのであった。

これに対して広池の方も、中野救済にかなり力を入れている。例えば、大正九年六月二十日の「決心」において、大正九年の秋冬の仕事として、関東の千代田城（皇室）、小田原（山県有朋）や、関西の大阪開発、本島―朝鮮開発などと並んで、「巴組の社員を大犠牲に導くこと」と記している。[21] また同年十一月二十八日の日記にも、やはり「決心」として、「中野に十二分に理を入るること。十二月。[22]」とのくだりが見られる。

さらに中野は、大正十年頃から、自ら主催して広池の講演会をしばしば開催するようになった。十年一月八日には、門司クラブにおいて「社会統制並びに経済産業進調根本原理」と題して門司市長高岡直吉、税関長古田忠徳、中野金次郎の三名が主催している。[23] また広池は、大正十一年四月七日から六月十八日まで朝鮮開発の旅に出るが、その出発前の三月二十七日から二十九日の三日間、中野は広池を門司清滝町の自宅に招き、自らの主催で講演会を開催、[24] さらに帰国したばかりの六月二十三日にも門司クラブで講演会を開催している。[25]

けだし、広池は、門司・下関を、九州開発・朝鮮開発の拠点にしようとしていたのではなかろうか。当時は、門司が、九州の表玄関として最も華やかなりし時代であったし、また門司は大陸および台湾行きの、下関は朝鮮渡航の発着地として、いずれも海上交通の要所であった。そして中野は、門司市会議員、門司商工会議所会頭その他、門司・下関のさまざまな業界組合の要職にあり、当所ではまぎれもなく屈指の名士であった。だとすれば、広池の活動を導いた中野の存在は、想像以上に大きな意味を持っていたとも考えられる。

立場こそ異なるにせよ、まさに心底から世を憂い、社会改善にむけて熱い志を持つ二人が、こうして出会い、固いきずなで結ばれることになったのである。

(二)専心通運を改造すべし

大正十二年（一九二三）七月四日、内国通運株式会社社長就任披露会が開かれた。社長に就任したのは、三上豊夷であり、返り咲きの二度目の就任であった。中野は、それに先立つ五月より同社専務取締役となり、この時すでに、内情不安な同社にあって実質的な経営責任を担っていた。広池は、この席に招待を受け、社員一同に講演を行なっている。広池の日記には、「重役一同大いに満足せられ今後継続的に聴講せんことを乞うに至る[26]」と記されている。おそらく、中野が巴組に引き続いて、内国通運の社員にも広池の教えを導こうとして企画したのであろう。

しかし先述のように、内国通運の経営状態は想像以上に困難な状況にあった。それから間もない七月二十四日、中野は広池を訪ねている。その翌日の二十五日の日記に、広池は次のような中野宛て書簡の控えを遺している。

信条

一、妄りに金を貸さず。
一、株を買わず。
一、企業に参加せず。
一、他会社の役員にならず。
一、政党に奔走せず。
一、妄りに貴族、富豪、大官に接触せず（利もあれど、禍の本はこれより生ず）。
一、専心通運を改造し、最高道徳にてまず自ら安心立命し、次に真面目に政策的でなく慈悲の上より社員および関係者の人心を救済すること。

右のごとくする時は、一時は消極的に類すれど、五年の後は東京において陰(隠)然たる一大勢力を成すべし。[27]

金の貸借、株の売買、政治家や官僚との接触を戒め、もっぱら自らも含めた社員の幸福と道徳性向上に力を注ぐべき趣旨の助言であった。

しかし中野は、この直後の八月に、内国通運が保有していた大北火災海上保険の株式を譲り受け、その社長に就任した。また、小運送問題改善については政官財界の関係者に積極かつ執拗に働きかけている。雇われ経営者として立場上やむを得ない点もあったかもしれない。あるいは経営危機があまりにさしせまったものと感じた中野に、焦りの気持ちが強かったのかもしれない。とにかく、こういった中野の動きを見透かしたような広池の助言であったが、中野にはその通りに従うことは困難であったようである。

その年の暮れ、中野の長男敏雄(十七歳)が生命にかかわる大病を患った。この時広池は敏雄救済のため門司行きを決定、途中天理教本部に立ち寄って、神前にお供えをなし、回復祈願をかけている。[28] また、一週間ほど門司の中野の自宅に泊まり込み、精神の持ち方、胃腸および神経の薬の用い方や食事療法まで具体的に指示し、[29] 大正十三年の正月は中野の自宅で迎えた。大正十二年は、金次郎四十二歳の厄年にあたる年で、関東大震災、内国通運の経営問題、敏雄の健康問題と、中野にとって悩みの絶えない年であった。

中野は、大正十三年に社長に就任すると、いよいよ運送業界再編という難事業に乗り出し、「一駅一店制」を旗頭に、運送大合同に向けて砕身した。とにかく東奔西走の毎日であった。大正十五年十月には合同運送株式会社が設立され、翌昭和二年(一九二七)の一月には内国通運がリードを取って国際運送、明治運送、合同運送の三社合併の仮契約を結んだ。

しかし、この過程における鉄道当局への交渉は困難を極めたし、これに反対する非合同勢力の抵抗も予想以上に激しかった。また、無数の店舗をかかえる合同内部の足並みも思うように揃わず、業績が悪化して配当すら困難な有様であった。この難局にあたり、中野は心痛の余り神経衰弱にかかり、何日もの間、一睡もできないという危険な状態に陥ってしまった。彼はしばらく医者と共に熱海ホテルに引きこもり治療に専念するが、やはり一睡もできない。

そこにたまたま熱海に滞在中であった広池が見舞いに来て、「死んだつもりで会社のことは一切専務以下に委せる」[30]ように助言した。広池は、連夜側近の女性たちを交替で中野の看病に差し向け、[31] 自らもホテルに詰め切って懇々と最高道徳の話を続けた。また、出版を間近に控えた『道徳科学の論文』の原稿を中野に渡していった。中野はよくこれを勉強し、精神の修養をした。[32] いかなる薬も効かなかったものが、これに耳を傾けているうちに、だんだん睡眠もとれるようになり、約一か月で全快してしまった。またも広池に救われた中野は、その精神の持ちかたによって、身体の健康を取り戻すことのできる大いなる力を感じ取っていた。

(三)実業界の道徳化を目指して——国際通運時代

昭和三年(一九二八)三月、運送四社が合併し、国際通運株式会社が設立された。中野いわく、「運送の合同は僕のやった、いろいろの仕事のうちで、最も大きいものだったと思う。まあ、僕としては夢が実現したんだ。若かったからこそ、あんな大仕事が成就できたんだよ。むちゃくちゃに目標に向かって突進したものさ」。[33]

中野の念願がとりあえず実現したことになる。それでは、この運送大合同に対して、広池はどのように考えていたのであろうか。

「合同ノ始反対ノ意見ナリシモ既ニ遅シト見テ時ヲ待テリ」[34]。結論から言えば、広池はもともと合同には反対であった。しかし、すでにもう決まってしまったことだから、しばらく様子を見てみようというのである。そして、さらに重要なことは、補助金など政府の保護を受けてはならないことに対して、口を酸っぱくして繰り返し注意していることである[35]。あくまでも自主独立の経営でいかなければ、弱味をもつことになり、事業活動に制約を受けるというのである。

しかし中野は、国際通運が発足して間もなく直面した危機を乗り切るのに、結局、鉄道省から多額の補助を仰いでしまった。広池は、中野のこの行為にあきらかな落胆の意を示している。広池は、昭和十二年（一九三七）七月、谷川で開かれたモラロジー第一回幹部講習会の席で次のように語っている。「政府の金を借りて合同をやってはいかんと言うたのに、政府の保護を借りてはいかんと言うたのに、合同会社は私の言う事を聞かんで、今は困っておる」[36]。昭和十二年七月といえば、すでに日通法が成立し、国際通運の解散が決まっている時であり、鉄道省の補助を受けたことが、結局中野を引退に追いやるに至った一つの大きな原因となったという判断である。

それでは国際通運を生かす道はどこにあるのか。広池は中野に次のような教訓を与えている。「合同ノ誠実、（A）運賃ノ公平無私、（B）廉価、（C）迅速確実、ヤヤ実現シテ未ダ十分ナラズ……道徳ノ高潮、社員ノ淘汰、真ニ合同ノ精神ヲ発揮ス」[37]。残るは、社員を最高道徳的に教育して会社内部を充実すること以外に、合同の成果を発揮することはできないというのである。広池は、その具体策として、国際通運に教育部を新設することを提案する。すなわち、①教育部は最高道徳の精神に則るべきこと、②教育部の部長は中野本人がこれに当たること、③名誉部長として広池自身が要請に応じ講義を行なう準備があること、④講話の時には社長、重役のいずれかが必ず臨席すること、その他、最高道徳の教育を行なう際の講師の派遣や教育の進め方に至るまで、十四項目にわたる詳

細な指導を行なっている[38]。

中野は、合同そのものや政府の補助に関しては広池の意に従えなかったものの、この社員の教育に熱心に取り組んだ点では終始一貫している。例えば、国際通運の年始めの社長訓示においては毎年、最高道徳による従業員の教育訓練を会社の方針として積極的に取り入れることを打ち出している[39]。また、『実業之日本』誌の特集号・昭和恐慌後の「不景気切り抜け実話」（昭和五年十月号）においては、「先づ道徳科学の鼓吹から」と題する記事を発表、社員各自の道徳観念の向上を図ることが社運の発展と不景気切り抜けの根本策であるとして、モラロジーの名を実業界に知らしめた。

事実、昭和四年頃から、国際通運の本支店および全国各地に散らばる合同運送会社において、最高道徳に関する講演会が頻繁に行なわれた。また昭和六年十月からは、広池の長男千英が国際通運の嘱託教養に任ぜられ、全国各地で行なわれたその講演回数は、たった一年余りの間に百回以上にも及び、延べ九千人もの聴講者を集めたという[40]。これらの講演会を通じて、モラロジーの普及がどれだけ促進されたかは、計り知れないものがある。

さらに興味深いのは、広池の『モラロジーおよび最高道徳の特質』（以下『特質』と略す）ならびに『特質のレコード』が作られたのも、中野の要請によるところが大きかったとも考えられることである。社長訓示の中で、中野はしばしば、「道徳科学の論文はあまりに膨大で読むのに骨が折れるから、社員教育にもっと使い易い縮刷版やレコード版の作成を要請している」旨のことを述べている[41]。もし『特質』や『特質のレコード』作成のきっかけが、中野からのそのような要請にあったとするならば、それらの製作費に中野からかなりの援助があったとしても不思議ではなかろう。実際、中野は全国各地の支店の従業員教育に『特質のレコード』を多用していたし、家族の者にもしばしば聞かせていたそうである[42]。

また中野は、昭和恐慌以降の経済不況にあたって、財界人へのモラロジー普及を図っていたと考えられる。あるいは中野が意図せざる場合でも、その人間関係を通じて、モラロジーへの関心を示した財界人も少なくないであろう。広池の『道徳科学の論文』を、渋沢栄一をはじめ、三井の団琢磨、製紙王とも呼ばれる大川平三郎、満鉄副総裁の江口定條らに届けたのは、中野であった。[43] また、郷誠之助や中島久万吉は言うに及ばず、浅野総一郎、藤原銀次郎などモラロジーに関心を示した経済人は、いずれも中野と親交の深い人物であった。[44]

昭和恐慌後の数年間は、大毎講演会（昭和六年九月二十一日）にも見られるように、広池が最も産業経済への働きかけを強くした時期である。日本経済は今後どうあるべきか。中野と広池の関心は、私的な関わりを超えた国家的問題においても重なりあっていたのではなかろうか。

(四)広池への傾倒

この頃、中野がいかに広池に傾倒していたか、広池の研究および社会教育活動に対する貢献の度合いを見てみるとよく分かる。

昭和四年（一九二九）十二月、中野は自らの所有地であった目白下落合の土地二百坪を広池に寄贈している。[45] 広池は、すでに大正末期頃から研究所の設立用地を探していたが、なかなか条件が折り合わずに決めかねていた。したがって、報恩協会などの社会教育活動の拠点も、中田中らの自宅に仮に置くなど、苦心していたのである。そして広池は、昭和七年六月に中野と会見の上、この下落合の地に講堂を建築することを決定し、[46] その秋の竣功をもって、モラロジー研究所は初めて確固たる拠点を得ることになったである。この講堂建築に際しても、両者が数回の話し合いをもった上で決定がなされており、その建築費に対しても中野から何らかの援助がなされたの

ではないかと考えられる。

また広池は、昭和九年（一九三四）に、『道徳科学の論文』の改訂版を出版している。昭和三年に出版された初版は非売品で八十五部しか製本されなかった。しかし広池にとって、今度の改訂版は、翌十年の道徳科学専攻塾開設に向けて貴重な財源となるものであった。中野は、この改訂版を一括して三百部を引き受けている。[47] その代金は、しめて八、五五〇円。広池は小金の専攻塾用地を一坪平均四十銭で購入しているから、中野による論文購入の代金は、土地二万坪分以上にも相当する計算になる。そして、より重要なのは、その額の大きさではなく、むしろそれを購入することの意味である。広池が団体幹部に宛てた昭和九年十一月三十一日付けの書簡には、次のように記されている。

> 当十一月末日以後に六万二千五百円を要せざれば、四月一日の開校を見るを得ず……右の資金の補充に関する具体的方法として、幹部ならびに会員各位にその一小部分ずつの負担を願えれば一層仕合せと存じ候。その方法は、例の『論文』を今より明年二月までに何百部にても宜しく、今一層広く頒布致し候よう御努力願い上げたく候。しかしながら、これまた無理を致しては、小生積年清節をもって立ち候ところの苦労水泡に帰し候間、この旨宜しく御心得下されたく候。たといいかなる事あるも、上品にして無理なく、各人皆感激して購入するようでなくては双方ともにつまらず候……今日創業時代の困難に対する至誠努力は、たとえば『論文』五冊の購入は、今後五年、十年後の一万円または十万円の御供えにもまさる理由を悟らしめ、この理由を悟りし人々にのみ求めさせ下されたく候。[48]

広池の宿願であった道徳科学専攻塾の設立にとって、こうした形での中野の援助がいかに大きな意味をもっていたかが伺われる。

昭和十三年(一九三八)六月、広池は他界した。中野が大正八年(一九一九)八月に始めた研究費援助は、広池が亡くなるまで休みなく続けられた。中野のモラロジー団体に対する協力はその後も続いた。昭和十六年道徳科学研究所の解消、および十七年財団法人広池学園設立の際には、初代理事の一人として尽力した。また戦後は、昭和二十二年(一九四七)道徳科学研究所の再建、および昭和二十五年麗沢短期大学設立の時も、二代所長広池千英の良き相談相手となった。[49] 中野の援助なくして、今日のモラロジー団体はなかったといっても過言ではなかろう。

四、結びにかえて

中野が初めて広池に出会ったのは、彼がまだ三十歳を越えたばかりの門司の一廻漕店主の頃であった。広池の講演は、国を憂い社会を思う青年実業家の心を撃った。中野は折からのブームに決して慢心することなく、広池の指導を謙虚に仰いだ。それによって、巴組の経営基盤は一層揺るぎないものになり、また中野の社会的信用も著しく高まった。

中野が内国通運の経営にかかわるようになったのは、決して単なる偶然でないように思われる。中野は、地方都市の一海運業者の器にだけに収まる人物ではなかった。内紛極まる内国通運の、あるいは混乱著しい運送業界の救世主として、天が中野を差し遣わしたように思えてならない。中野は、運送業界の改善を自らに与えられた使命として、その理想に邁進していったに違いない。しかし、その過程は苦難に満ちた茨の道であった。元来、経営者とは孤独なものである。「従業員諸君は最高道徳家たれ……」、社員と一体となってこの困難に立ち向かう中野にとって、広池の存在は何よりもの心の支えであった。

ところが苦難は単に事業上のことだけにはとどまるものではなかった。関東大震災、長男敏男の大患、さらに

中野自身の不眠症などの災いが次々と容赦なく降り懸かった。こういった心身の危機から中野を救ったのも、やはり広池だったのである。

国際通運の設立をテコに、全国各地の運送店合同を推進するという、中野の理想完成に向けての努力が始まる。中野にとって、この運送大合同は、生涯の大事業であった。しかし、この頃から、合併の方法、政府の補助などに関して、広池とやや意見の食い違いが生じ始める。中野は、この頃にはすでに押しも押されぬ財界の実力者となっている。金融恐慌、昭和恐慌など不況が続き、さらに軍事色が次第に強まるという深刻な時勢の中、国内の輸送事業を一手に引き受ける一大企業の経営者として、思うにまかせぬ状況も多々あったであろうことも想像に難くない。しかし中野は、最後の砦として、モラロジーによる従業員の道徳化の方針だけは、あくまでも徹底して貫き通した。

中野が通運を引退して約半年後、広池は他界する。その頃、中野の意識は、もはや一企業の経営者としてのそれを超え、国家的な広がりをもっていた。日本が戦時体制に突入し、さらに敗戦を迎えると、中野は国家再建に向けて政財界にさまざまな働きかけを行なった。中野に広池の意志を受け継ぐ気持ちがあったかどうかは知るよしもないが、彼が死ぬまでこのような日本の将来に対する思いをもち続けたことは、長年にわたって広池の薫陶を受け続けたことと決して無縁ではなかろう。

広池は、「人間には、精神、経済、肉体を蝕む三つの病がある」[50]と言った。そして、広池による中野救済は、この三つの病すべてにわたるまるごとの人間救済であった。その意味においてこそ、「今日まで色々な難関を切り抜け、どうやら人の上に立ち会社の経営をしているのは一に先生の御教の賜物である」[51]という中野の言葉の重みを真に味わうことができるのである。

しかし、広池の中野救済の事例は、単なる美談として済まされるべきものではない。それは、自らの生涯をかけて真面目に最高道徳を体得実行しようとした実業家の、極めて人間臭い努力の過程を物語るものである。中野は先の言葉に続けて次のように述べている。

しかし、先生の教えらるる最高道徳はその体得実行が決して易いものではない。否、むしろ困難である。故に一回や二回くらい聞いたからと言って真に分るものではない……回を重ねてこの御話を聴き、徐々に実行を積み重ねて行かなくてはならない。私のごときも先生の教に絶対服従する事が善いと思いつつ、それに取捨選択を加えて従わぬために後悔した事は一再に止まらない。どうか諸君は私の過去の失敗に鑑みて、先生の教をできるだけ率直に受け入れ、これに服従してゆかれむ事を希望する次第である。そうして、つまらぬ失敗をくりかえさないようにしていただきたい。(52)

「中野が広池の指示に従わなかったことにより、両者の関係が疎遠になっていった」との見解もあるようだが、筆者はそのような考え方に、ある種の冷たさを感じる。中野は、実業界の頂点に達しながらも、ことあるごとに広池の指導を仰ぎ、時には悩み、時には反発し、いろいろ失敗を重ねつつ、それでもやはり広池の教えを心の拠り所として、自らの理想実現にひたむきに生き抜いた。むしろ、そこにこそ、道を求め、道を極めようと終生努力をし続けた一人の大実業家の真摯な生きざまを感得することができるのである。

事業の規模が大きくなるにつれ、その経営者の公人としての性格も増す。事業の永続と個人の幸福、家の繁栄の関係はどう考えるべきなのか？　大組織の最高道徳化はいかにして可能なのか？　人間は、やはり健康、長命、開運、子孫繁栄といった客観的条件まで整わなければ、本当の幸福とは言えないのであろうか？　苦難に挑戦し続けることの中にこそ、内面的な心の喜びが生まれるとも言えるのではないだろうか？　広池による中野金次郎

救済の事例は、真の救済の意味するところは何かについて、我々に多くの課題を投げ掛けている。

〈注〉

(1)中野金次郎「従業員諸君は総べて最高道徳者たれ」『運輸』第十巻第十一号、昭和四年十月十日、四～七頁。

(2)以下、中野金次郎の生い立ちに関しては、主に村田弘『中野金次郎伝』東洋書館（昭和三十二年）による。

(3)秋田家の中には、巴組を金次郎に乗っ取られたと感じた者もあったようである。そのためか、中野は、秋田の長男・又助のフランス留学の渡航費を出したり、また長女・つる子を自らの養女とし、原田家に嫁がせた後も、その子弟の学費まで出すなど、秋田家の面倒を後々まで見ている。さらに、この二人には、金次郎の死後、遺産の一部も遺している。やがて誤解も解け、後年、つる子は、中野のことを大恩人と感謝しきっていたという。（中野直氏談）

(4)村田、前掲書、一一四～一一五頁。

(5)巴組は、三上が、関門の地における代理店として、大阪の石田および和歌山の藤岡という富豪の援助を得て設置したもので、三人の出資によるところから、巴組の名がつけられた。

(6)中野真吾。兄・金次郎の後を受けて、巴組を経営したほか、門司市長その他の重職を歴任、地元ではむしろ金次郎よりも人望を集めた人物である。また、金次郎が上京した後は、門司における広池の接待役となり、最高道徳の講演会を主催するなど、モラロジーに対する造詣も兄に劣らず深いものがあった。

(7)補助金の交付は、実際には六十万円で打ち切られた。

(8)番町会の第一の信条は、「私欲を肥やすべからず」というものであった。中野も、この点では徹底していた。時にはこの信条に合わぬ者がメンバーに加わることもあったが、中野はそのようなメンバーとはっきり一線を画し、清廉潔白を貫いた。（中野直、談）

(9)『社史・日本通運株式会社』昭和三十七年、二九二頁。

(10)昭和二十六年十一月に社名が変更され、中野汽船株式会社となる。中野汽船は、後に三菱海運傘下に吸収され、海運大合同で三菱海運が日本郵船に吸収合併された時に解散した。

(11)岸信介が反対派の目を忍んで親米政策のシナリオを作っ

たのは中野の自宅であり、その時は、安岡正篤も一緒だったらしい。（中野直、談）

(12)村田、前掲書、八六頁。

(13)松山廉「故中野金次郎さん」『中野金次郎追想録』一九九～二〇〇頁。

(14)松山の記述の内容に次のような誤りを指摘することができる。

①松山によれば、中野が広池と初めて出会ったのは、大正二年となっている。しかし、その頃、広池は天理中学の校長を勤めており、九州などに出かけた事実はない。

②「船を造れ」との広池の指導は事実かどうか疑わしい。まず、大正三年には、まだ二人は出会っていない。また、中野は船の所有はしていたが、自ら船を造ったのは門司商船にかかわってからで、大正六年の彦島丸（一五〇〇トン、建造費一〇五万円）が初めてであった。しかし、これが完成したのは大戦末期で、休戦に入ると船の価格は十分の一に下がり、大きな損失を出した。広池の指導が事実であったとすれば、逆に中野は大きな被害を蒙ったことになる。「船を所有せよ」という指導で財をなしたか、「船を造れ」との指導で損失に遭ったかでは、全く正反対の結果になる。

松山の記述は、このような具体的な事実関係においては、やや信憑性に欠ける面もあるが、広池が中野の事業に対して、かなり立ち入った指導をしており、中野も素直にそれに従ったことを示す資料としては、決してその価値を減じるものではなかろう。

(15)モラロジー研究所編『広池千九郎日記』第二巻、一三九頁、昭和六十一年（広池学園出版部）。

(16)『広池千九郎日記』第二巻、二一二頁。

(17)この頃の広池の中野指導に関して興味深い資料がある。大正七年九月二十六日、門司に滞在中の広池の懺悔の中に、「成金を助くる心の中に、自利の埃なきや。全く純無垢に助け一条の心となること」というくだりがある。この「成金」は、「木屋瀬」に在住する人物であることが記されているだけで、特定することはできないが、中野が木屋瀬採炭株式会社の経営に携わっていたことから、中野に関係する人物と考えることもできる。だとすれば、広池が中野も含めた「成金」たちに対して、常に自利の欲が入らないかどうか反省確認しながら、その救済に努めていたと読み取ることができる。

(18)『モラロジー研究所紀要』旧第三号、九頁。

(19)『広池千九郎日記』第三巻、二三〇頁。

(20)村田、前掲書、一八九頁。村田によれば、「大正三年から

毎月二百円ずつ」とあるが、大正三年には、まだ二人は出会っていない。広池側の資料では、大正八年八月十八日付けの日記に、「この夜、金次郎氏、予の研究費を毎月おくることを約す」（『広池千九郎日記』第二巻、二〇七頁）と記されているが、金額については触れられていない。両資料から、「大正八年八月から毎月二百円ずつ」と推測するのが妥当と考えられる。なお、この研究費援助は、広池が亡くなる昭和十三年六月まで続けられたという（松山、前掲書、一九九頁）。

(21)『広池千九郎日記』第二巻、二五七～二五八頁。

(22)『広池千九郎日記』第二巻、二六九頁。

(23)「門司新報」大正十年一月六日、塚谷哲朗編「広池博士資料調査報告集Ⅴ」一〇一頁。

(24)『広池千九郎日記』第三巻、一一頁。

(25)『広池千九郎日記』第三巻、二〇頁。演題は「最高道徳と社会改造」（「門司新報」大正十一年六月二十三日、塚谷哲朗編「広池博士資料調査報告集Ⅴ」一〇一～一〇二頁）。

(26)『広池千九郎日記』第三巻、七四頁。

(27)『広池千九郎日記』第三巻、八〇頁。それまでの内国通運は、同社株式を取得することによって経営の実権を握り、会社を私物化しようとする経営者たちの食い物にされていた。三上・中野の配陣のねらいは、その経営の立て直しにあったのだが、その乱れを治めるのに、決して相手と張り合うような手を打ってはならない、との忠告が含まれていると考えられる。

(28)『広池千九郎日記』第三巻、九五～九九頁。

(29)広池千九郎遺稿（以下遺稿と略す）「中野敏雄に贈る教訓」（仮題）大正十二年。

(30)村田、前掲書、二三一頁。

(31)『広池千九郎日記』第三巻、一九七～一九九頁。

(32)松山、前掲書、二〇二頁。

(33)村田、前掲書、二一五頁。

(34)遺稿「日東運送店指導」（仮題）年代不明。

(35)「鉄道省ノ関係ノ度合如何、之ヲ切ル事。各自自由競争ノ位置ニ立ツ事。独立セズバ繁栄ノ見込立タズ」（遺稿「企業の内部を開発すること」仮題、年代不明）、あるいは「保護ニテハイケナイ」（遺稿「中野社長へ」仮題、年代不明）。

(36)遺稿「伝統報恩とモラロジー教育」（仮題）昭和十二年。なお、中野が政府の補助金を受けたことに対して、次のような内容のことが語り伝えられている。すなわち、中野は補助金を受けるべきかどうかを相談すべく、何度も広池の元に足を運んだ。広池は、その度に「受けてはならない」と助言したが、中野側ではどうしても受けざるを得ない状況に追い込まれてしまった。これに対して、

広池は「保護を受けなければ、通運の社長は、代々中野家が世襲できたであろうに……」と口惜しがっていたということである。

(37)遺稿「中野社長へ」。

(38)遺稿「中野金次郎宛書簡草稿」(仮題)。

(39)通運業務研究会編『通運読本「国際通運社長訓示・挨拶など」』昭和三十六年四月八日、四三～四四頁。昭和五年一月四日、始業式における中野金次郎社長の訓示。

(40)『通運読本』八四～八五頁。昭和八年一月四日、始業式における中野金次郎社長の訓示。

(41)『通運読本』四四～四五頁。昭和五年一月四日、始業式における中野金次郎社長の訓示。

(42)中野金次郎・真吾とも、あまり教育熱心だったので、社員や家族の中には「特質のレコード」などに、少々閉口していた者もあったという。(中野尊徳および中野直、談)

(43)昭和四年三月七日・二十二日・五月三十日付広池千九郎宛中野金次郎書簡など。

(44)遺稿「東京第一回講習会規則」(仮題)、昭和七年。昭和七年から八年にかけて、東京、大阪、京都などでモラロジー講習会が開催されたが、その案内書の「開会の趣旨」の項には、渋沢栄一、中島久万吉、大川平三郎、藤原銀次郎などの実業人が、広池の講演に共鳴し、産業、経済における諸問題の根本的解決法として最高道徳への関心を示している旨が記されている。

(45)『広池千九郎日記』第三巻、三二〇頁。

(46)『広池千九郎日記』第四巻、二六〇～二六三頁。

(47)『広池千九郎日記』第五巻、一三八頁。

(48)『広池千九郎日記』第五巻、二三七～二四二頁。

(49)広池千英「中野さんを追憶す」『中野金次郎追想録』二五一頁。

(50)モラロジー研究所編『改訂広池千九郎語録』二五七頁、昭和五十七年(広池学園出版部)。

(51)『モラロジー研究所紀要』旧三号、十頁。

(52)『モラロジー研究所紀要』旧三号、十頁。

※去る昭和昭和六十二年七月二十九日に中野尊徳氏が、また九月十二日には中野直氏が、それぞれ筆者のインタヴューに快く応じ、長時間にわったて多くの興味深いお話を聴かせて下さった。紙面を借りて、両氏の御好意に対し衷心より感謝の意を表する次第である。

なお、中野尊徳氏は、中野真吾氏の次男、すなわち中野金次郎氏の甥にあたる。現在、北九州市門司区に在住。

また、中野直氏は、中野敏雄氏の長男、すなわち中野金次郎の孫にあたる。現在、長野県飯山市の斑尾高原に在住。